
イジメられる側にも問題がある

浮魚塩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イジメられる側にも問題がある

【Nコード】

N21810

【作者名】

浮魚塩

【あらすじ】

イジメられている女生徒を見つけた。

俺はそこに割って入った。

だけど、その女生徒は…

（前書き）

タイトルはあれですが、内容は薄っぺらく、何を訴えるわけでもない、不真面目なものに仕上がっております。

大変好みの別れる題目、且つ、テイストかと思われまので、読み進める場合にはご用心のほどを…

その女生徒はイジメられていた。数人のグループに囲まれて。そんな場面を目撃してしまった。

なんてこった。

これほど面倒くさい立ち位置があるか？

知らなければよかった。

それなら知らないで済ませられる。

けれど知ってしまった。

見て見ぬフリなど最悪だ。

「お前ら、イジメなんかみつともないぞ！」

俺はその場に割り込んだ。

偽善だと思う。だけど、偽善も善だろ？ やらないよりいいんだ。

「は？ 何言ってるんのお前」

割り込んで一旦引く連中じゃなかったか。

「その耳は飾りか。それとも言葉も理解できない低脳か？」

「言わせておけば！」

イジメっ子の一人が拳を上げる。

「おい、先公だ。逃げるぞ！」

「チッ！」

イジメ集団は去っていった。

正直、助かった。腕つぶしに自信は無い。

「大丈夫か？」

一人俯いていた女生徒に声をかけた。

「……………」

女生徒は黙ったまま唇を噛んでいた。悔しかったんだろう。きっと。

「……………」

女生徒が何かを呟いた。

けれど、声が小さくてうまく聞き取れなかった。

「余計なことしないで！」

俺は思わずたじろいだ。

予想していたのとは全く違う反応だったからだ。

「うまく…、やってたのに…！」

イジメられているけれど、本人はそれをイジメとして受け取っていないのか。

「うまくやってたのよ！」

ああ、そうだ。本人はそれでうまくやっていたと思っているやつだ。それがその連中との付き合い方なのだと思って、いや、思い込

んでいる。

「うまくって…、あれはどう見てもイジメだし、それを見て見ぬふりなんてできない！」

「私はあれでよかった！ あれがよかった…！」

ほんとうにいいと思っているのか。そうだとしたら、なんて…。

「せっかくイジメられるようになったのに！ 全部水の泡じゃない…！」

「……………」

イジメられるようになった？
水の泡？

「分厚い眼鏡かけて、声も小さくして、前髪も伸ばして顔隠して、どんくさくして、ようやくイジメられるようになったのよ?!」

「いや、どういこと？ それ…」

両腕を使い、大袈裟な身振りで女生徒は言う。

「私はドMなの！」

えー……………と、…ええっ？

「えつと?」

きつと、今の俺は世界で一番間抜けな面をしているに違いない。
それぐらいその女生徒が何を言っているのかわからなかった。

「責任とって」

「へ?」

「責任をとって!」

「責任たつて…」

まさかそんなことを言われるなんて、思いにもよらず。

「あなたが私をイジメればいいの。簡単でしょ!」

「こ、断る!」

どうして止めに入った行為を自分がしなくちゃならないんだ。

「そんなのやめとけよ。イジメられて何が楽しいんだ?」

「楽しくないかないわ! 嬉しいのよ! 心を抉られるような言葉を、意味の無い、理不尽で不条理な暴力を、幼稚で拙くて残酷で、成長不良の、情けない不出来な心を、私に向けてほしいのよ!」

…いやまあ、言っていることにはほぼ同意はできる。

余計な言葉が無ければ。

「だからといってお前がイジメられていい理由にはならないだろ？」

「だからあなたが責任とって私をイジメなさいよ！」

「だから俺がそんなことをする理由がない！」

「理由なんて口上でいくらでも作れるわ！ アイツ等が私をイジメようとした理由なんだと思う？ 『お前暗いんだよ』って、たったそれだけの理由。それなら、『お前ピーマン嫌いなんだろ』ってのだって理由になるわ！ あなたも『お前はド変態マゾヒストなんだよ』って理由でイジメたらいいのよ！」

極端すぎる理論だ。

「バカかお前、理由と言っても限度があるだろ」

「今のっ！ 『バカかお前』っての！ それでいいじゃない！」

墓穴を掘った。

勢い任せに口走った結果がこれだよ。

「他人を認めないその姿勢！ あなたもこれでイジメっ子！」

「そんな標語みたいに言うな！ あー、もういい。じゃあな！」

付き合ってられない。

「絶対責任とつてもらうから！」

「はいはい、好きにしてください」

と、口走った結果が。

「飼い主様、どうかこの卑しい雌犬めをお叱りください」
「これだよ…」

集まる好奇と侮蔑の視線。

目の前で床にひれ伏している女生徒。

首輪に犬耳をつけて、裸足で汚れた衣服でそこにいる。

俺の記憶に誤りがなければ、間違いなく昨日の女生徒だ。

しかし、まったく雰囲気が違う。

昨日までの暗い彼女はそこにはなく、ただ己を下卑する雌犬の姿がそこにあった。

こいつはイジメられるために暗い女生徒を演じてきたのだ。このような転身など容易なことなのだろう。

俺はこんなことのためにあの場に割って入ったわけじゃない。

「どこかへ…、行ってくれ…」

「はああ…、そんな、飼い主様の冷たいお言葉、私、心を抉られるような思いです…」

このマゾヒストには何を言っても快樂になつてしまつのか。

「じゃあ、いい子だから普通にしていってくれ…」

女生徒は口をキュツと結んだまま身悶えしている。

「……………」

ああ、そうか。

イジメられたいのにイジメてもらえないという切なさを快樂に交換することができたのか。

最早、何を言っても彼女には快樂にしかないのだろう。

打つ手が…、無い…。

イジメられる側にも…、問題がある…。

「飼い主様、飼い主として、責任持つてくださいね」

それからというもの、俺には『黒柳高校最凶のサディスト』、略して『黒凶S』というあだ名をつけられ、全女生徒から怖れられるようになったとき。

追伸。

あのドM女生徒に対してのイジメは、『変態と関わり合いになりたくない』という理由で無くなった。

（後書き）

えー、相変わらずの突発的な思い付き。
これを読んで何か感じたら、むしろ敗けだと思っ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2181o/>

イジメられる側にも問題がある

2010年10月11日02時26分発行